The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高校英語授業における学習活動と活動形態が学習者の参加意欲に与える影響の検討
Author(s)	綱澤, えり子
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100480
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高校英語授業における学習活動と活動形態が学習者の参加意欲に与える影響の検討

綱澤えり子（言語文化学・D1）

1. はじめに

EFL（English as a Foreign Language）環境下にある日本の高校生にとって，英語の授業はコミュニケーション能力を育成する貴重な場である．2018 年改訂の学習指導要領(文部科学省, 2018)では，「主体的・対話的で深い学び」を促進する観点から，コミュニケーション重視の言語活動実践が以前にも増して求められるようになった．この方針の下，授業内では問題演習や様々なコミュニケーション活動が行われている．英語を使用した言語活動はコミュニケーション能力の向上に不可欠である一方，自己呈示の場ともなり得るため，高校生にとっては不安を感じる要因となりうる(八島, 2019)．本研究では，授業内活動の効果的な形態，生徒が参加したい学習活動とその要因，ならびに参加を阻害する要因を検討していく．

2. リサーチクエスチョン

本研究では，英語授業内の学習活動と活動形態が高校生の参加意欲に与える影響を明らかにすることを目的とし，以下のリサーチクエスチョンを設定した．

RQ1: 英語授業内の学習活動における活動形態の違いが，どのように学習者の参加意欲に影響を与えるのか.

RQ2: 高校生が「参加したい」または「参加したくない」と感じる英語授業内の学習活動は何か.

RQ3: 高校生が英語授業内の活動やその形態に対して「参加したい」「参加したくない」と感じる要因は何か.

3. 調査方法

3.1 調査対象者

大阪府にある全日制公立高等学校に在籍する全校生徒を対象に，2021 年 10 月に質問紙調査を任意で実施した．その結果，計 890 名分の有効回答が得られた.

3.2 質問紙項目

文部科学省検定教科書や高校英語授業内で一般的に実施されると考えられる学習活動を検討し，その中から 11 種類を提示した．提示した以下の学習活動に関して，積極的に参加したい活動か，あるいは苦手に感じる活動か回答を得た．英語教室内で多く行われるであろう 4 つの活動 1)–4) では，それぞれの活動形態（ソロ，ペア，グループ[1]）ごとに回答を得た．全ての項目において，選択した理由を自由記述にて回答を求めた.

1) 文法や読解問題を解く
2) 英単語を発音したり，英文を音読したりする
3) 単語，英文，文法等を覚える
4) 英語の会話をする
5) 英語を使ったゲームをする
6) 英語でディスカッションをする

[1] ソロとは 1 人で行う活動，ペアとは二人で行う活動，グループとは 3 名以上で行う活動を表す.

7) 前に出て英語でスピーチ，プレゼンテーションをする
8) 英語で自分の考えを書く
9) 洋楽を聞く・歌う
10) ALT の先生と英語で話す
11) リスニング練習をする

4. 分析方法

RQ 1，2 について，自由記述による理由の有無は問わず頻度を算出した．すべての回答で複数回答可とし，有効回答数の合計を算出している．RQ 3 については，理由を述べた自由記述回答に対して，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いてコード化を行った．

5. 結果と考察

RQ1 を明らかにするため，活動しやすい・活動しにくいと感じる活動形態について，ソロ，ペア，グループの活動形態に分けて回答を得た（表 1，表 2）．

まず，参加したい活動形態に関する有効回答数を表 1 に示す．「文法や読解問題を解く」，「英単語を発音したり，英文を発音したりする」，「単語，英文，文法等を覚える」は，ソロの活動形態が最も好まれる傾向が示された．「英語の会話をする」では，ペアの活動形態の方がグループよりも好まれる傾向が確認された．次に，苦手と感じる活動形態に関する有効回答数を表 2 に示す．「文法や読解問題を解く」，「英単語を発音したり，英文を発音したりする」については，ペアの活動形態の有効回答数が最も多かった．「単語，英文，文法等を覚える」ではソロが，「英語の会話をする」ではグループの有効回答数が最も多い結果が示された．

表 1. 活動しやすいと感じる活動形態の有効回答数（複数回答可）

活動	ソロ	ペア	グループ
文法や読解問題を解く	331	130	228
英単語を発音したり，英文を音読したりする	186	139	125
単語，英文，文法等を覚える	241	144	123
英語の会話をする		213	155
Total	758	626	631

表 2. 活動しにくいと感じる活動形態の有効回答数（複数回答可）

活動	ソロ	ペア	グループ
文法や読解問題を解く	173	232	133
英単語を発音したり，英文を音読したりする	151	169	135
単語，英文，文法等を覚える	215	140	141
英語の会話をする		176	213
Total	539	717	622

以上の結果より，個人作業が中心の活動はソロが好まれ，ペアが活動しにくい活動形態として最も多く選ばれた．これは，個人で取り組みやすい活動では，共同作業が負担となる可能性を示唆している．活動形態の違いは参加意欲に影響を与え，コミュニケーション活動では少人数の方が取り組みやすいことが示された．

RQ2 を明らかにするため，「英語を使ったゲームをする」，「英語でディスカッションをする」，「前に出て英語でス

ピーチ，プレゼンテーションをする」，「英語で自分の考えを書く」，「洋楽を聞く・歌う」，「ALT の先生と英語で話す」，「リスニング練習をする」活動について，頻度を算出した．参加したい活動として有効回答数で最も多かった活動は「洋楽を聴く，歌う」(有効回答数 585) であり，次いで「英語を使ったゲームをする」(有効回答数 442) であった．授業内で好まれる活動には共通して，楽しみながら学習できるという要素が含まれていた．

一方で，苦手と感じる活動は，「前に出て英語でスピーチ，プレゼンテーションをする」(有効回答数 495)が最も多く，次いで「英語で自分の考えを書く」(有効回答数 341)，であった．英語で表現する活動に，多くの生徒が苦手意識を抱いている可能性が考えられる．

RQ3 を明らかにするため，理由を述べた自由記述回答に対して，GTA の手法を用いオープンコーディングを行った．自由記述のオープンコード化は，理由を述べた生徒のみに対してコード化を行っている[2]．本稿では特徴的なもののみを示す．

活動形態に関して，活動しやすい・活動しにくいと感じる活動形態共にソロが最も多かった「単語，英文，文法等を覚える活動」についてオープンコード化の例を示す．ソロの学習形態を好む理由（有効回答数 91）として，「効果的な活動形態」(38%) が最も多く挙げられ，自分なりに工夫しながら勉強できる，覚えるという部分に関しては一人でやった方が良いなど，自分なりの学習方法で学習できるため，一人での学習が効果的であると捉えていることを示唆する回答が示された．苦手と感じる理由（有効回答数 72）では，「英語学習意欲の減退」(28%) が最も多く，自らやりたいとは思わないなど，学習を負担に感じていることを示唆する回答が多く得られた．次いで「知識不足からくる課題に対する抵抗感」(19%) が多く，英語の並び方が分からないといった文法や構造を理解することの難しさ示す回答が見られた．

授業内活動の活動形態に関して，生徒は授業内に一人で問題に取り組む時間を必要としており，その際には指導者の状況に応じた支援を必要としていることが示唆された．ペアやグループ活動には助け合える利点がある一方，不安や比較による劣等感を感じる生徒も一定数いることが示された．

次に学習活動では，中でも最も参加したくない活動として最も有効回答数が多かった「前に出て英語でスピーチ，プレゼンをする」に関するオープンコード化の例を表 3，表 4 に示す．

表 3. 「前に出て英語でスピーチ，プレゼンテーションをする」(参加したい理由)：自由記述のオープンコード化

オープンコーディング	回答の具体例	回答数	割合
学習意欲の向上	「楽しみながら覚えたいから」「やる気が出るから」	5	26%
活動に対する満足感	「人前で話すのが好き」「良い経験になるから」	5	26%
効果的な学習方法	「自分が知っている英語を使って話すのは大切」「中学校の時にして，力がついたから」	5	26%
教室内相互関係の向上	「みんなとやると楽しい」	2	11%
理解度の向上	「いろんな英単語を覚えられる」	2	11%
Total		19	100%

[2] 提示された教室内活動及び活動形態に対して，選択はしたものの理由を記述していない生徒がいたために，理由を記述していた生徒のみをオープンコード化の分析対象としている．

表 4. 「前に出て英語でスピーチ，プレゼンテーションをする」(参加したくない理由)：自由記述のオープンコード化

オープンコーディング	回答の具体例	回答数	割合
人前での発表に対する苦手意識	「大勢の前で発表するのが苦手」「そもそも前に出て話すのが嫌い」	51	33%
英語教室内不安	「発音とかイントネーションが不安なので嫌」「緊張してお腹が痛くなる」	34	22%
課題に対する抵抗感	「将来英語でスピーチしないと思う」「暗記して話すだけなら意味がない」	27	17%
考えを英語にできないもどかしさ	「自分の意見を英語化できない」「文法がいまいちわかっていないので，文章ができない」	25	16%
英語に対する苦手意識	「英語で話せるまでの能力がない」「苦手な英語を人前で話したくない」	16	10%
学習意欲の低下	「面倒くさい」「面白くない」	3	2%
Total		156	100%

得られた自由記述回答からは，まず言語を問わず，人前に立って話すことに対する抵抗感の個人差が大きく影響している可能性が示された．活動を肯定的に捉えている回答からは，活動の必要性や，英語力の向上に寄与することを経験から生徒達自身も理解していることが伺えた．一方で否定的に活動を捉えている生徒には，強い不安感や，難しい課題であるという認識から活動を負担に感じてしまう傾向が見られた．このことは，心理的負担を軽減する指導者の支援が不十分であれば，参加意欲が低下する可能性を示唆していると言えよう．

6. 研究の限界点と今後の展望

本研究の限界点として，学習活動や活動形態とその成果である英語習熟度との関係を明らかにできていない点が挙げられる．今後は日本の高校生の習熟度と学習活動の相互作用についても検討するとともに，指導者が特定の活動を選択する際の意図を明らかにし，指導者と学習者の視点を統合することが重要と考える．

参考文献

文部科学省 (2018). 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説　外国語編』
https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf (最終閲覧日 2025-01-10).
八島智子 (2019). 『外国語学習とコミュニケーションの心理　研究と教育の視点』 関西大学出版部.